

「劇場」国家としての沖縄

中

ガヴァン・マコーマック

一六〇九年の薩摩藩に始まり、一八七九年の明治国家、一九四五年以後の米国そして一九七二年からの米日両国の軍事主義に沖縄はずっと悩まされてきた。

安全保障に関し、政府も官僚も冷戦時代の思考の枠から脱け出せないことが日本の問題であるが、それは沖縄にとって輪をかけて大きな問題となっている。米国の協定が何よりも大切で、そのためにはどんなことも引き受けようという強い思い込みがある。その負担は沖縄に一番重くのしかかる。

完全な「属国」へ
冷戦後（一九九七年の新ガイドライン策定から二〇〇五）〇六年の米軍再編ま

呈したものである。

「戦争国家」沖縄

一九四七年から七二年にかけて米国のアジア、太平洋地域を覆う冷戦体制のなか

平和構築する場に

生命賛歌の理想掲げる時期

部分北朝鮮（中国を含める人もいるが）の脅威に対する基地だと考えられてい

米日軍事同盟の基盤にある核兵器の使用可能性は隠されているが、日本の安

島というアイデンティティを島の人々は決して受け入れなかつたにちがいない。

日本政府は、基地反対派を骨抜きにし、市民の権利や民主主義の原則より、沖縄

その「ごまかしは念入りなアジェンダに向け、県民の同意を確保しよう」と苦闘してきた。日本政府は沖縄

に隠されてもいない。返還は事実上日本政府が買ったのであった。返還の七年前

に日本政府が、四十年に及ぶ植民地支配に対する償いとして韓国政府に支払った賠償金の二倍ほどの金額だ

の下で本土は「平和国家」を謳歌したものの沖縄は本土から切り離された「戦争国家」であった。「返還」後

一九四六年日本が憲法を採択したときにも、その基本原則は紛争解決の手段として

の武力に代えるというものであった。沖縄の「命どう

宝」という原則にのっとりたものであった。

「ごまかし

沖縄の人々は復帰すれば、沖縄も日本憲法の庇護

下におかれ、基地の重圧も

生命賛歌の理想掲げる時期

否定できない。一九四五年、国連設立のときも、一九四六年日本が憲法を採択したときにも、その基本原則は紛争解決の手段として

の武力に代えるというものであった。沖縄の「命どう宝」という原則にのっとりたものであった。

「ごまかし

沖縄の人々は復帰すれば、沖縄も日本憲法の庇護

下におかれ、基地の重圧も

生命賛歌の理想掲げる時期

五年まで阻止された。反対派を分裂させ、弱体化させ、買収しようと莫大なお金が注ぎ込まれた。大浦湾ではサンゴやジュゴンの群

障を考えれば、沖縄の戦争準備態勢は平和建設態勢に変わる必要がある。沖縄の戦争用意は朝鮮半島と台湾海峡に向けられて



米軍嘉手納基地全景と同基地で即応訓練を行うF-18戦闘機。イラクから帰還した強襲揚陸艦・エセックス、日米共同訓練（コラージユ）